ブレイク・フリー

路傍の砂利

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

始めに断っておく。

この物語は気高きあの血族の物語ではない。その外の物語だ。

一人は過去を探した。自分自身が何者であるかを知るために。

もう一人は親友を探した。彼女と交わした約束を果たすために。

その答えを見つけたとき……彼らは歩きだすだろう。

これは始まりの物語。

目次

ホット・リミット　その①　1
ホット・リミット　その②　5
ホット・リミット　その③　9
ホット・リミット　その④　13
謎の男　22
イタリアへ　29
閑話①　悪魔　34

ホット・リミット　その①

月明かりが眩しい夜だった。
けれど、それは綺麗な月明かりというにはいささかばかり強烈で、気味が悪いまでもあった。
今日はできるだけ早く帰ろうとしていたんだ。だっていうのに……
「おい」
なんて誰かの声が聞こえたもんだから思わず立ち止まっちまった。それが一番の間違いだった。
「こんな時間になにをしてやがる？」
声のしたほうに顔を向けると、そこには俺のいる場所とは違う方向を見るやつがいた。俺はそいつの顔を認識するやいなや、思わず「ゲッ」と声をあげてしまう。
俺が学校で最も苦手にしている野郎、西宮託志がそこにいた。
西宮の視線をおうとそこには全身真っ黒な衣服をまとった、いかにも不審者ですってやつがいた。
おいおい……いかにお前がクラスの人気者だからって、こんな夜更けに警察ごっこかよ。
幸いにも西宮にとってここは死角らしく、俺に気づいていないようだ。面倒事はごめんだ。逃げるなら今しかない。
しかし、俺は動けなかった。西宮にむけられるはずのその視線が、自分に向けられていることに気づいたからだ。
それは獲物を狙う猛禽類の目をしていた。そいつに睨まれちまった俺は体がすくんで動けなくなっちまった。さしずめ、なにやらに睨まれたカエルってところだろう。
「もう一度聞く、ここでなにをしている」
「……」
動けなくなったおれはその光景をただ、じっと見つめることしかできない。
場に訪れる静寂。その時間を無限のように感じた。

しかし、その時間も終わりを迎える。
「俺はこの学校の新任の清掃員でね。ほら、君もこの学校に最近、行方不明の事件が頻発しているって聞いただろう？俺はその警備にあたってたってわけ」
「とぼけるんじゃあない」
「マジだよマジ。もしかして、俺のこの格好を見て疑ってる？　人を見かけで判断するんじゃあねえぜ」
「フッ、いや確かに、人を見かけだけで判断するのは人として三流に違いない。だがな……あんたはその内ポケットの膨らみを……俺の疑いをどう晴らすってんだ？」
「……」
男はニヤリと不適に笑う。いやな笑顔だった。まるで映画の終盤、味方だって絶対の信頼をおいていたやつが、実は自分が敵であったことを明かすときみたいな感じだった。
「ご明察。確かに俺は一連の事件の犯人で間違いはない。ただ……あんたの目的が見えねえな。リスクを犯してまで犯罪者（俺）を問い詰める、理由が見あたらねえ」
「生憎だが、お前に話すようなことはなにもないぜ。なぜなら、いまからお前は再起不能になるんだからな」
本当にそうしてしまうのだと、確信に似た感覚を覚えるほどに、いまの西宮には凄みがあった。
しかしそれでも男は不適な笑みを浮かべ、その余裕を崩さない。
「なるほど、この俺が再起不能ね。たとえ仮に、万が一いや、億が一そうだとしても、あんたは重大なことを見落としてるぜ」
そう言うと男は自らの懐に手を入れた。
「俺の目的が何かってことをなぁ！」
男が懐から取り出したのは独特な形状をした弓矢だった。その切っ先は誰が触るでもなく、何故か俺の方向を向いていて、死角にいた西宮も俺の存在に気づいた。
男はおもむろに振り返り、弓矢を構えた。
避けられない。

俺はそう直感した。
間に合わない。
そう、誰も間に合わない。ましてや道理がない。
そして十分に引き絞られた矢が、今にも飛来するというタイミング。
しかし、実際に飛来したのは石だった。
普通、飛来しているものは初速よりも速く動くことはないし、減速して最終的には速度を失う。
だが、それは減速するというよりは、むしろ加速度的に、スピードが増しているように見えた。
例えるなら重力。
リンゴの落下。
しかしそのさまは落下とは呼べない。一流のメジャーリーガーが放った、手元で凄まじいノビを見せる投球のようだった。
「お前も見落としていたな。お前は既に俺の射程圏内だ」
男の手から弓矢が落下する。
しかし、それは男にとってなんら問題もない、詮なきことだった。西宮もまた見落としていたのだ。男の能力が何なのかを。
「この手はあまり使いたくなかったんだがね」
男はおもむろに矢に手をかざした。
けして飛ぶはずのない矢は、飛んだ。いや、飛んだというよりは射出されたといったほうがいいだろう。それも凄まじい速度で。
避けることなど、出来なかった。
矢は当然のようにとまることはなく、俺の肩に深く突き刺さった。
「ぐあああああああ！」
瞬間、焼けるような痛みが脳内を逆る。赤熱した鉄の棒を肩に突っ込まれてるような、そんな感覚。
これが何かに貫かれる痛みなのか。
いや、違う。これはそんな単純な痛みじゃない。
これは自分のなかにあるはずのない異物をぶちこまれた感覚。
「大丈夫か!?」

駄目だ意識が遠退いていく。ちぃ、死ぬ前に聞く声が嫌いなやつのもんだなんて、俺は一体どこで間違えたんだ。

ホット・リミット　その②

「果たして……彼は選ばれた人間なのか……」
彼らの預かり知らぬところで、人知れずそんな呟きがもらされた。
一体、誰にたいして呟かれたものなのか見当はつかない。しかし、そう呟いた男の眼前には大きな校庭と、そこにいる三人の姿が広がっていた。

◆◆◆

「っ!?」
「おっと、そう簡単にはいかせられないぜ」
もがき苦しむ彼に駆け寄ろうとする西宮だったが、やはりその行く手は阻まれる。
「さて、これで俺の目的も半分は達成ってとこだが……」
「……」
「まぁ、そりゃこうなるわな……」
西宮はおもむろに半身の姿勢をとった。それは彼にとってルーティーンのようなものだった。彼が覚悟を決め、その力を行使するときにいつも行う儀式のようなものだった。
すると半身になることでできたスペースに明らかな違和感を覚える。
そう、なにかが存在しているのだ。
それは『そばに現れ立つもの』《ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｍｅ》
そしてそれは『立ち向かうもの』《ｓｔａｎｄ　ｕｐ　ｔｏ》
人々はそれをスタンドと呼ぶ。
「それがあんたのスタンドってわけかい」
スタンドは使い手の精神の具現化である。だが、西宮のスタンドは彼に似つかわしくない雰囲気をまとっていた。
例えるなら、喜劇を演じる道化師。チャップリンの映画にでも出てきそうな可愛げがあった。
「俺は別に善人って訳じゃあない。だが……正しい道がなんなのか

は知っているつもりだ」
「覚悟しろ、外道。俺のスタンドは手加減をしらない」
その時、男は戦いの火蓋が切られたのを肌で感じた。そして西宮のスタンドが何かしらの攻撃をしてくることを予期した。
それに呼応するように男もスタンドを発現しようとする。
が、しかしそれはあまりに刹那の出来事すぎた。
「ぶべらぁぁ！」
は、速い……！
気がつけば顔面を殴られていた。目にも止まらぬ速さとはまさにこのことだと男は思った。
確かに油断もしていた。距離もそこそこあるし、自分にもスタンドを発現させるくらいの余裕はあるだろうとタカをくくっていたのも認める。だが、男はそれなりに場数を踏んでいるし、反射神経にも多少の自信があったのだ。だというのに反応すら出来なかった。
「ホット・リミットォ！」
男の表情から余裕がなくなった。即座に自身のスタンドを発現させ、反撃に転じる。
「っ!?」
一発、二発、三発。そのすべてが掠りすらしない。
確かに男のスタンドは近距離が得意な方ではない、どちらかというと中距離型だ。何度かこの手の……いわゆる近距離パワー型と戦ったことはあるがこんなにも歴然とした差を感じたのはいままでで”一人”しかいなかった。
「ぷっ、くふふふふふ」
どういうわけか男は突然笑い始めた。しかも、それはちょっとした笑いってわけでもなく大笑いだった。
困惑したように西宮が問う。
「？　なにがおかしい？」
「あー、いや失敬。ほらピンチのときほど笑えっていうだろう。つまりはそういうことだよ」
そうだ、落ち着け。落ち着いて勝利のために必要なことをするん

だ。
男にとって笑うというのは自らを落ち着けるルーティーンのようなものだった。
どんな逆境であっても笑えばなんとかなる気がしたし、自分が余裕を感じているような気がする。
そう、落ち着いて考えれば、ただすこし速くて強いだけ。それだけだ。
さっきの男の奇行は西宮にすこしの動揺を抱かせた。有り体にいえば気味が悪かったのだ。
ただ、それだけではない。うまく言葉にできないが、男にまだ隠していることがある気がした。
早めに勝負を決めるべきだ。
西宮のスタンドはとどめをさすべく男に迫る。
それに対して男のスタンドが手をかざす。
「!?」
結論からいうと西宮の攻撃は空振りに終わった。勝負を決めようとするには、まだ時期尚早すぎたのだ。
ただ、西宮の頭に疑問が生まれる。自分は確実に男の顔面にパンチを当てたはずだった。それに男は自分のスタンドのスピードについていけていないようだった。故にあれは確実に当たっているはずだったと。
そう、あれは当たらなかったのではない。
まるで同極の磁石を近づけたときのように、男の顔面から逸れたのだ。
自分の攻撃が当たらない。であらば無闇に行動に出るのではなく、様子見に徹するのがセオリーだ。
しかし……
「ぐっ……」
西宮の目的は敵を倒すことだけではない。目下、最も重要なのは巻き込まれた一般人である彼を救出することなのだ。
ならば……

自らの渾身の連打を叩き込むだけだ。
「ウラララララララララ！」
しかし……
「焦ったな」
その渾身の連打はただの一発も当たることはなく……
「焦っちゃあいけないぜ。焦燥はいつしか恐怖になり、そして恐怖は人を無能にする」
なにかが、爆発した。

ホット・リミット　その③

凄まじい爆発音とともに俺は目を開いた。
そこにあったのは知らない天井……どころではなく、真っ暗な闇だった。というか空だった。
状況がまるで飲み込めない。ただ右肩に鋭い痛みが走るばかりだ。
いや、そうだ。俺は矢のような何かを刺されたんだ。
それであのクラスで一番いけ好かねえ野郎の声が……って、そういうばあの二人はどうなったんだ。
視線をあげる。そして彼らがいた場所に目を向ける。
「なんだってんだよ……これ!?」
眼前にさっきの光景はなかった。いるはずの二人の姿も見当たらない。ただ、霧のように砂ぼこりが舞っているだけだった。
「ぐっ……」
どこかでうめき声が聞こえる。
そこにいたのは西宮だった。しかしその姿はさきほどの彼からは想像がつかないほどに傷だらけだった。上半紙は服がほとんど破けているし、ところどころに裂傷をおっている。
あまりにも傷だらけだったから、思わず駆け寄る。すると、どうやらやつは俺に気づいたようで、安心したように微笑を携えた。
「堺……だよな？　無事なようで何よりだぜ」
「お前っ……なにが無事でなによりだっ。おれのことなんかよりまず、自分を優先しやがれ！」
早く手当てしなければならないというのに、この現状はそれを許さない。
「アレを食らってまだ立ち上がるとはな……」
さっきの男だった。しかし、西宮とちがってこちらの方はほとんど無傷で、余裕そうにこちらに近づいてきている。
「おお！」
突然、男の余裕は崩れた。といっても男の優位は依然変わることはなく、それは歓喜といった感じだった。

「君が生きてるってことは俺の仕事はもう終わったってこと……なはずなんだがね」
しかし、男はどこか不思議そうに俺を覗きこむ。その瞳はまるで虚構だった。本当に、肝っ玉が底冷えしてしまうほどに、温度を感じられなかった。
「なんで君には〝でていない〟んだ？」
恐ろしい。
俺はこのとき初めて殺気というものをもろに受けたのだと思う。率直にただ恐ろしかった。だがそれ以上に俺は自分自身に失望していた。
西宮はこんなものに晒されながら、それでもなお……
情けない。心底情けない。
どうして体は動きやしないんだ。
腹立たしい。とにかく腹立たしい。
だというのに、俺には力がない。
「まぁ、失敗だったっていうならそれはそれで俺には関係ないんだがね。　あー、そうそう、巻き込んでしまって悪かったね。いま楽に……っ!?」
突如、兎のようないでだちをした、人形ような何かが男に殴りかかった。
西宮だった。確証はないけれど、確信できた。
「おいおい、勘弁してくれよ。本当に、どれだけタフなんだよ？」
「これくらいでタフなんていってくれるんじゃあねえよ」
「誇張なしで大型トラックに轢かれるくらいの衝撃なんだがな」
「大型トラック？　トミカの間違いじゃねえか？」
西宮がおどけるようにそう答えると、何かが男の琴線に触れたのか、みるからに不機嫌になった。
「気にいらないな。なぜそうまでして他人を助けようとする？　それも家族でもない赤の他人だ。あんたは誰かを助けることの意味を理解しているのか？」
「意味……だと？」

「ああ、そうとも……海に溺れている二人のうち一人を助けるということは、もう一人が溺死することを容認するということ！あんたがいましようとしてるのはそういうことだ……」
男は矢継ぎ早に問いただす。
「あんたに覚悟はあるのか？　」
その時、俺が真っ先に感じたのは男の凄みだった。それは西宮も同じだっただろう。
「お前がただの外道じゃないってことは分かったよ……ただの外道は戦いに覚悟を求めないからな……」
男のその言に感じるものがあったのだろう。西宮は真剣な面持ちでなおも続ける。
「だがな……お前にどれだけの理由があったとしても……お前のやってるそれは正道じゃない……邪道だ」
さっき俺が感じたのは決して凄みだけではなかった。そのとき、実に勝手な解釈だが、それでも男がただの悪人には見えなかった。男が私欲のためではなく、自分以外の誰かのために目的を果たそうとしているように見えたのだ。
きっと西宮もそう感じたのだろう。
だが、西宮はそれでも男を否定する。
「覚悟があるかと聞いたな？　俺にはある！ただそれはお前とは違う……正しい道をゆく覚悟だ！」
かっこいいじゃねえか。
素直にそう思った。
「……ならば、果たしてみろ。そんな状態で、そこの彼を守りながら、俺を倒すなんていう骨董無形な話をな！」
「……上等！」
西宮と男の戦いの火蓋は再び切られた。

だが、なんの力も持たない俺は男の言うとおりなにもすることができない。
だが……それでも……

足手まといになんて、なってたまるか。
そのとき、何かが目の前に現れた。
それは妖精のように小さくて、だっていうのにウルトラマンの星人みたいにグロテスクな姿をしていた。
『きゅみー』
なにかを訴えているのか。まるで自己主張しているかのように、それは音を発した。
するとどうだろうか。俺の足場は確かに土だったはずなのに、石工が何年も磨かねえとできないような、つるつるの大理石に変わりやがった。
これをこいつがやったっていうのか。
『きゅー』
そうみたいだった。しかし、それがなんだっていうんだ。こいつがこんな物質を作り替えるような、魔法みたいな能力を持っていたとしてもそれは俺の……
そのとき、俺はそいつの額に矢の紋様があることに気づいた。それは自分に突き刺された矢と同じものだった。そして同時に思い至る。
なら、この力は……いや、こいつは俺の……
「スタンド……」
無意識に、誰に聞くでもなく、そう呟いていた。

ホット・リミット　その④

やりづらい。

西宮は率直にそう思った。彼自身、これまでスタンド使いと何度か戦っては来ているが、それでもそれは片手で数えられるほどしかない。己の自慢のスピードとパワーが通用しない敵を相手取るには経験値があまりにも足りていない。

かといっても彼にはまだ見せていないとっておきがある。しかし、相手の能力が全く分かっていない現状でそれを使うのはあまりにもリスクが高すぎる。高すぎるのだが……

「どうした？大口を叩いたわりには攻めあぐねているようだが？」

「……」

西宮という男の最も優れている部分は判断力とその年齢で持ち合わせているのが不思議に思えるほどの覚悟からなる、決断力である。

が、それは西宮が物事を深く考えることができないという欠点を持つがゆえに、持たざるを得なかった能力とも言える。

長々と書いたが単に面倒くさがりなのだ。短絡的ともいう。トランプタワーを作っているときに、最後の一枚が上手くいかないからと、すべて崩したこともある。ゲームでレベルを完スト一歩手前まであげても、最後のレベルアップのときにメタルスライムに何度か逃げられただけでデータを削除したりもした。

つまり何がいいたいのかというと……

西宮にとってリスクが高かろうが低かろうが、そんなことはどうでもいい。

そして、リスク度外視の悪手は必然的に相手の不意をつくことに成功する。

「ぐはぁ！」

こいつ正気か!?

男はあまりに予想外の相手の出方に驚愕する。

それもそうだろう。相手が将棋でいうところの二歩ぐらいのことをやってきたのだから。しかし、殺し合いには将棋のようなルールは

ない。
　といってもそんなラッキーパンチがそう何度も通じる訳もなく……
「……流石に、そう簡単にはいかないよな」
「俺には君がバカなのか、それともとてつもなく賢いのか、判断できそうにないな」
「……間違いなく賢くはないだろうな。他ならぬ、自分でもそう思う」
　無意味に終わったかのように見えたこの行為は西宮にとって大きな収穫だった。
　西宮の攻撃は確かに当たった。そう、さきほどは当たらなかったのにだ。
　つまり、男の能力には使用の際にラグ、もしくは予備動作が必要なことが判明したのだ。
　そしてこれは男にとって大きな痛手にほかならない。
　なぜなら、男は尋常じゃないほどに慎重だからだ。男はことスタンド戦において、自分の能力を悟られる前に倒さなければならないと考えているのだ。石橋を叩かなくては気がすまないのである。
　そしてさらに男の不運は続く。
「！」
　響きわたるは彼の声。その声に西宮も思わず振り向く。
「一旦退くぞ！」
「は？」
　西宮には理解が追い付かない。同様に男にも意味がわからなかった。
　それは唐突さという意味でも二人を困惑させたに違いない。しかしある程度ことを噛み砕きはじめた二人に最も疑問を抱かせたのは、この状況でどう逃げるのかということだった。
　しかし、その答えはすぐにわかることになる。
　彼はおもむろに地面に手をついた。意図的に両手で地面を押すようにして手をついた。

「なっ!?」
すると、突如として男と彼らの間に壁ができた。比喩でもなんでもなく、文字通り男の目の前に壁がそびえ立ったのだ。
状況を理解するのは男よりも西宮の方が早かった。
真っ先に走り出す。少しでも遠くへ。少しでも相手の死角へ。
「っ!?」
遅れて、男もようやく反応する。動いたのは男のスタンド。素早くその手を正面へかざす。
壁の脆い部分から極小の砂粒その手に吸い寄せられる。しかしそれ以外、特別なことは起こりはしない……そう思った矢先だ。
「っ!?」
鳴り響く凄まじい轟音。舞い散る砂塵。
砂塵が晴れると、彼らと男とを分断していた壁は跡形もなく消し飛んでいた。
しかし……
それと同時に、男は彼らを視認できなかったことに歯噛みした。

「怪我の具合はどうだ?」
「ぼちぼちってところだな」
ここなら当分の間、見つかることはないだろうというところまできた。
怪我の具合を尋ねれば、西宮はたいしたことがなさそうにしていたが、そんなはずがないことは俺にも分かった。
けれど、それでも、なんでもないようにしているこいつに、俺はあわせなければならない気がした。
「それで、一時撤退をえらぶってことはなにか考えがあるのか?」
意外にも、初めに話を切り出したのは西宮だった。
「ああ」
そして、俺はさっきの西宮と男の戦いでわかったこと……いや、まだ予測の範疇ではあるが気づいたことを話す。

「あの男の能力がわかった……かもしれない」
「……!?」
百パーセント驚愕の表情で西宮は俺をみる。

◆

「俺の仮説が正しければ、俺たちの勝機はこれしかない……と思う」
黙って彼の話を聞いていた西宮はただただ戦慄していた。
お前はスタンドに目覚めたばかりだろう？
だというのにこれは一体どういうことだ？
スタンド能力に目覚めたばかりの人間が、ほんの少し俺たちの戦いをみただけで、あろうことかその能力を見破っちまったってのか。
なにより、西宮が思うに最も恐ろしいのは、その冷静さと発想力。その冷静さはまるで何度も戦いに身を投じてきたかのような、その発想力はまるで赤壁で曹操の大軍を知略のみでうち破った諸葛孔明のごとく。
まさに天性の才能であった。そう言う他に今起きてるこの現状……彼の能力の高さを説明することはできなかった。
「お前はそうすれば勝てると……そう思っているんだな？」
「あ、ああ」
自信なさげに答える彼に西宮はふっと笑みをこぼした。
「なら信じる。それに……」
「俺はお前をずっとすごいやつだと思っていたんだ。信じるにはそれだけで十分だ」

◆

男はただの一歩もその体を動かすことなく、そこに佇んでいた。きっと俺たちが逃げたあとずっと。俺たちを探すよりも待ち構えるほうがよいと考えたんだろう。
まぁ、かといって周囲への警戒を怠るはずもなく、男の極限まで広げた射程範囲に入ればその時、俺たちの命は簡単に刈り取られるだろうと錯覚させられた。
それほどまでの注意・警戒。

だというのに当の俺たちは何事もなかったかのように、極めて自然に男の目の前に躍り出た。
男は拍子抜けを覚えたような顔で言った。
「作戦会議は終わったようだが……どうやら警戒していたのも杞憂におわりそうだ」
「ほぉ、意外に間抜けなんだな。俺たちが無策にも正面から現れるとでも思ったのか？」
そういってスタンドを顕現させる西宮。対する男もそれに反応してスタンドを現す。
拍子抜けした……といっても男が警戒を解くことはなかった。すぐさま臨戦体制に移った。
「事実、無計画であると思うがね……状況は先と何も変わらない。むしろ悪化しているまでもある」
「己の間違いを自覚できないのは愚かなことだって、偉い人が言ってたぜ」
そう自信満々にいってみせる西宮。
しかし、確かに男の言うとおり状況は依然、俺たちが不利なままだ。西宮の攻撃はあたらない。それに俺たちに必要なのは隙だ。だというのに男は用心深く、隙を見せる気配を微塵も感じさせない。
互いに威嚇し合う。先に手を出した方が負けると、直感で理解しているからだ。
膠着状態は続いた。とても長い間。
しかし、先に耐えきれなくなったのは西宮のほうだった。
「しゃらくせぇ！」
そう言って男に向かって右ストレートを放つ。しかし、男は自らの期待通りにことが運んでいることに口角をあげた。
警戒状態の男はどの方向から攻撃が来ても対応できる体勢だったのだろう。西宮のスタンドの拳を危なげなくいなしてみせた。
「そうだ、はじめからわかっていたじゃあないか。この俺が作戦通りなんて利口なことができないことはよぉ！」
しかし、攻撃をいなされ窮地に立たされたというのに、不思議なこ

とに西宮に焦りはなかった。
作戦を無視されたことにいい思いはしない、むしろ少し苛立ったが、これも不思議なことに俺がそれ以上に怒ることはなかった。
それはきっとそこにあったのが信頼であったからだろう。だからこそ、俺は西宮を信じるし、彼の信頼に応えたいと素直に思えた。
「何を企もうと無意味だ。もうチェックメイトだからな」
その時、男のスタンドが、がら空きになった西宮の体に手をかざした。
やはりさっきの攻撃は悪手だったのだ。
さっきの爆発から十分なインターバルがあった。そして西宮に大きな隙もできた。
ならばこの男は容赦しない。そこにはアニメのようなご都合主義など存在せず、自らの全力をもってして俺たちを屠らんとする絶対的な意思だけがあった。
「ホットリミットォ！」
男のスタンド能力が発動した。その手のひらの周囲の空間が歪み始める。今度こそこの爆発を受ければ西宮は立ち上がれないだろう。
俺は驚かない。
男が容赦のないこと、そして紛れもなく強者であることを知っていたから。
俺は焦らない。
男なら一度信じたものを疑うのはナンセンスだからだ。
西宮は必ず俺の信頼に応える。俺は確信している。
だから俺は自分のやるべきことをやるだけだ。
そして爆発音がなる瞬間……
西宮は凄まじい勢いで後方に飛んだ。まるで何かに引っ張れるかのように。
「ブレイク・フリー！」
男は慎重すぎるあまりに西宮のスタンドの速さと強さだけを警戒しすぎていた。
ゆえに男は見落としていたのだ。彼のスタンドの本来の能力を。

「っ!?」
爆発は不発になった。紛れもなく西宮の実力によって。そして好機は訪れた。
「堺!」
「あとは任せろ!」
俺はすかさず男に向かって泥を投げつけた。なんの変哲もない砂に水分を含ませただけの泥だ。
そしてそれは攻撃が不発に終わった男のスタンドの手のひらにわずかに吸い寄せられた。
これで準備は終わった。必要なのは炭素と水、たったそれだけだ。
「カーペンターズ!」
俺は自分の能力を詳しく知らない。詳しく知らないからこそ、少しでも成功するようにと水と土(泥)を投げた。念には念を重ねて能力を発動したのだ。
その物質は炭素と水素のみで構成されている。
故にただの泥であったそれは一瞬で気体へと状態変化し、吸い寄せられたというにも関わらず、男のスタンド手のひらにはなにも残らなかった。
いや、正確にはそこにある。しかしその物質は男自身の能力……手のひらに吸い寄せた空気を圧縮する力によって、男を蝕む劇薬へと変貌した。
「っ!?」
男の断末魔はけして声にならなかった。かき消されたのだ。まぎれもなく、男自身の能力のはずである爆発によって。
生成された物質の名はアセチレン。空気よりも軽いその物質はバーナーなどによく用いられる。そして酸素よりもはるかに低圧で保管されるそれは、高圧下で分解爆発を起こすことで知られている。
「あんたは強かったよ……ただの外道じゃないあんたは……本当に……」
爆炎が寒空の冷風にふっと消えた。

「無事で何よりだぜ……」
俺よりはるかに無事じゃない姿をしているそいつは、そんなことをぬかしてきた。
本当にお前なにものなんだよ……タフすぎて言葉がでねえよ。ターミネーターなの？アイルビーバックするの？
「明らかに無事じゃないお前にそんなことを言われた、ほぼ無傷の俺はなんてこたえりゃあいいんだ？　……いや、こんなことになったのは全部俺のせいだよな。本当にすまなかった……」
頭を下げて謝罪する俺に対して、西宮は後ろ髪をかきながらなんでもない風に言った。
「なんのことだか、さっぱり分かんないな」
格好つけんじゃねえよ。ホントになんかカッコいいから、無性に腹立つんだよ。
……まぁ、今回のことは貸しにしといてもらおう。
「俺は……まだ負けられ……ない……！　負けるわけにはいかないんだ……！」
その時、後方で何かが立ち上がった。
俺たちはすぐに後ろを振り返り、それの姿を確認した。
体のあちこちが焼け焦げて、片腕のないその男は文字通りぼろぼろの足で体を引きずりながら俺たちへ近づいてきている。
「妹は……妹は俺でなきゃ救えないんだ……！」
それを聞いた俺と西宮が言葉を発することはなかった。
ただ、俺たちはそれを、その姿をじっと見つめた。目をそらさず、焼き付けるように。
「負けられないんだっ！」
男のスタンドが発現した。それと同時に爆発が起ころうとする。
「ブレイク・フリー！」
「カーペンターズ！」
俺たちは自身のスタンドを発現させた。
「Ｓａｌｖａｔｉｏｎ　ｔｏ　救われぬものにせめてもの救いを。背負うものよ……これは貴様の覚悟に対する敬意だ」

しかし、俺たちが動き出すよりもはるかに早く、爆発は止まった。
そして今度こそ男が立ち上がることはもう二度となかった。

謎の男

俺たちはなにもすることができなかった。その光景をただ見つめること以外には。

なぜならそれがあまりにも慈悲深いものだったから。聖女が喪に服すさまを見ていると錯覚するほどに、それが手厚く葬られていたから。

その厚葬が一通り終わると、目の前にいる彼は最後に祈りを捧げた。見たこともない所作であったが、俺たちはそれを強く神聖なものに感じた。

「さて、俺も自分のやるべきことをしよう」

そう言って彼は立ち上がると俺たちのほうに向き直る。

「堺……」

「あぁ……」

格が……いや、次元が違う。

俺たちは言葉を交わすこともなくそう直感した。得体のしれなさはもちろんのこと、目の前にいる男の気迫は先ほど戦っていた男をはるかに凌駕するものだった。

さっきの男は紛れもなく強かった。二人がかりでなければ自分たちが負けてしまっていたのでは、と思うほどに。それは紛れもない事実だ。

しかし、それは明確に勝てないと思うほどの実力差ではなかった。目の前にいる彼は違う。まるで始まりの村に魔王が現れたのと同じように、彼は俺たちが戦ってはいけないレベルの人間だと本能が訴えてくる。

「……っ！」

足が震える。頭では立ち向かうことを考えていても体がそれを断固として拒絶している。

「……ブレイク・フリー！」

しかし、隣にいる彼は違った。

それは見る人によっては無謀な蛮勇にうつるかもしれない。だが、

それはけして無謀ではなかった。
それは立ち向かう勇気。実力差ではない。有利であるか不利であるかでもない。人間にはどんな逆境にも立ち向かわなければならないときがある。
西宮にとって今がそのときであった。
それを目の前の彼も分かっているのだろう。彼はニヤリと笑うと自らのスタンドを発現させた。
「ウラララララララ！」
西宮のスタンド……ブレイク・フリーは圧倒的なスピードと優れたパワーをもつ。こと、スピードに至ってはおそらく世界中を探しても右に出るものがいないほどに。
故にさっきの戦いで、ホットリミットはその攻撃になすすべがなかった。
しかし……
「ふっ……」
男はそれを初見で……それも至近距離であるというのにも関わらず、すべてさばききって見せた。
ありえない。
それが俺たちの抱いた総意だった。ホットリミットのように能力による特別な防御法があるのならまだわかる。しかし、彼のスタンドはなにか特殊な技を使うこともなく、さばききったのだ。そもそも、反射神経では追い付けない、異常なスピードなのにも関わらず、だ。目で追えるはずがないのである。それなのにまるでどこに攻撃がくるのかあらかじめ分かっているかのような、まるで未来がわかっているかのような、そんな骨董無形なことをこのスタンドは成し遂げてみせたのだ。
「西宮！下だ！」
「っ！　ああ！」
俺は地面に両手をつく。もう四の五のいってはいられない。俺も覚悟を決めなければならない。
彼らの立つ地面がぼこぼこと動き出す。すると地面は剣山のよう

な姿になり男を突き刺さんとする。
しかし、その攻撃は当たることはなく、紙一重で避けられる。
「ブレイク・フリー！」
しかし、あの攻撃はブラフだ。本命は今俺が作り出した物質による攻撃。
「俺のスタンドが打ち出したものは重力にしたがって加速度的にあんたに向かう……」
その物質は金。鉄の約三倍も重たい物質。力は速度×質量。当たれば勝てるし、速度からして当たらないはずがない。
これが今の俺たちにできる全力だ。
「まだ……拙い……」
しかし……男は俺たちの渾身の一撃を見ることもなく避けてみせた。
終始、まるで相手の手のひらの中で踊らされているような、不気味な……すごく、いやな感じだった。
「はぁはぁ……」
「くっ……」
おそらくすでに限界だった。俺の能力はもう使えなくなっていたし、西宮に至ってはすでに先の戦いでの負傷が大きすぎた。ここまで動けていたのがあまりに不思議なほどに。
それに対して男は息を切らすどころか、俺たちに攻撃すらしていない。
完敗……だった。
だというのに西宮はまだ立ち上がった。限界などとうに越えているはずなのに。
「お前たちが何者で……何が目的で俺を狙い……そして俺の親友をさらったのかは知らねえ……
だが、俺はどんなに現状が絶望的でも……手足をもがれて相手を睨み付けることしかできなくなっても……必ずお前らを殺し、絶対にあいつを取り戻して見せるっ……！」
そこには何があろうと、必ずそうなるのだろうと確信させるほどの

凄みがあった。
初めて知った。西宮に親友がいて、その人がいま危険であることを。
そして理解した。そんな状態だというのに、彼が俺を助けてくれたということを。
ならば、今俺がすべきことはなんだ？
ただ、呆然と敗北を認め、死を待つだけか？
違う……！
今俺がすべきなのは、どんなに無様であろうが足掻くことだろうが！
「おい、西宮……お前は一人じゃあねえ。
お前が親友を救うのなら、俺はそれを助ける！いま目の前にいるこいつがお前を殺すというのなら、俺はなにをしたって……血反吐ぶちかまそうがそれを止めてみせる……！
だから……」
言葉を続けようとしたが、それは他ならぬ目の前の男によって遮られた。
「……広瀬絵里、彼女はいまイタリアにいる……」
「っ!?なに!?」
明らかな動揺ともに西宮は目を見開いた。
広瀬絵里……
おそらく女性の名前だと思われるそれが西宮の琴線に触れたのは、広瀬という女性が、彼が死んでも救うと豪語した西宮の親友で他ならないからだろう。
「広瀬がイタリアに……？　いや、それが事実かどうかよりも、お前は……」
「なぜそれを知っていて、そして君に教えるか……か」
「……!?」
「その問いに対して俺はなにも答えない。俺はただ道を示すだけだからだ……
その道になにがあるかは他ならぬ君自身が探さなくっちゃあなら

ない……」
道を示す……？
これが罠だという可能性も一瞬考えられたが、やはりそれはありえないと確信できる。なぜならいま目の前にいるこの男は遠回しに罠を張り巡らす必要もなく、俺たちをいとも容易く殺すことができるからだ。
では、道とはなんだ。そしてなぜ俺たちにその道とやらを示す。目的がわからない。
だが、それについてこいつは答えないと断言した。ならば俺がこいつにきかなければならないのはこの男が俺たちの敵であるか否かだ。
「……あんたは今、その問いに対して答えないといったな？っていうことはよぉ、答えられる質問もあるってことで間違いはねえよな～？」
「……冷静さは必要だ。どんな状況であっても冷静ささえ保てれば、次になにをすればいいか自ずとわかるからだ。
あぁ、そうだよ堺。すくなくとも君が今聞こうとしていることに対してはノーに限りなく近いといっておこう。」
「っ！　こんなに不気味なのは初めてだぜ。でっけえ仏像に虚ろな瞳で見透かされてるようなよぉ」
本当にくそほど気持ちが悪い、いやな感じだ。
だがわかったこともある。それはこいつが間違いなく敵ではないということだ。限りなくノーに近いということは、この男が敵でも味方でもなく、しかし味方に限りなく近い、おそらく俺たちと利害が一致しているということだろう。
ならば俺はこの男を信用できる。なぜなら下手に友好的なやつよりも、こういう自らの目的にそって他人を利用しようとするやつのほうが信用に値するからだ。
「敵ではないというのは理解したよ。だがよぉ、なら尚更あんたは俺たちの問いに答えなければならないんじゃあねえのか？
あんたの目的とやらに俺たちが必要だってことはよお！」
「……いまこの場で君たちを殺さない、これが俺にとっての君たち

に対するリターンのつもりだったんだが、それでは足りないというのだな？」
「あぁ、その通りだ。すくなくともあんたの目的かそれと同等の価値がある情報じゃねえと俺は納得しねえ」
「俺がいますぐ君たちを殺すといっても？」
「……あぁ。しかし、あんたに本当にできるのか？　あんたにとって俺たちを殺すっていうのはなんのメリットもなければ、損しか生まないんだと思うんだがな」
「……確かに一理はある」
なかなかにリスキーな賭けだった。おそらく殺すなんてことはしないだろうと思っていたが、それはあくまで俺の予測でしかなかったからだ。だが、賭けには勝てた。だというのに、妙なことに俺には男の口角が少し上がっているように見えるのだ。
そして男は答えた。
「君の記憶の答えも、そこに行けば見つかる」
西宮は意味がわからなさそうにその言葉を飲み込み損ねていた。普通なら俺もそうなっていたことだろう。しかし……
「……なぜ……そのことを……!?　それに……!?」
俺にとってそれは自分自身の根幹に触れるものだったのだ。
「……それ以上は答えない。それに君はいったはずだ。私の目的と同等の価値がある情報ならば納得すると……
そして君は私の答えに納得している……違うか？」
「……違わない」
西宮には悪いが男の言うとおりだった。しかし、尚更この男を俺は理解しなければないないと強く感じた。
それは西宮もきっと同じ風に思ったに違いない。
「君たちとはまた出会うことになる。そのときに君たちが道のはてになにがあるか、探し当てていることを祈るとするよ」
そして男は消えた。もう空も白みはじめていい時間になったというのにまだ夜はあけない。ただ、俺たちの目の前を照明の光が明るく照らしていた。

イタリアへ

謎の男の来訪から少しの間、俺たちはたがいに沈黙していた。それは西宮も俺も、自分のなかで彼の言葉を整理する必要があったからだろう。

そして先に口を開いたのは西宮だった。

「墓をつくろう」

「……墓？」

「そうだ。俺たちが殺した彼の墓を……

それが俺たちが彼の覚悟に対して、負わなければならない責任だと思うから」

「……そうだな」

そうして俺たちはおそらく昼間でも人気がないような場所に穴を掘って彼の死体を埋めた。

死体を持ち上げたとき、その首あたりから煤けたペンダントのようなものが転がってきた。

それを拾い上げ、不躾なことは承知で開くと、そこには小さくてかわいい女の子の写真があった。

互いに言葉を発することはなかった。男とこの写真の少女にどんな事情があったのか、詳しくは知らない。だが、それでも彼が生き残ることで救われるものがあったのだと強く感じた。

＊

あれから夜が明けて、朝になると俺たちはそれぞれの帰路についた。

明日、またここに集まることだけを約束して。

俺は人の気配が出てくる前に家に帰ることができた。

父も母も、兄妹もいない。だからどれだけ俺の帰る時間が遅くなろうが、どれだけ俺がぼろぼろでいようが、誰も心配することはない。

ただ、一人で飯をくい、一人で風呂に入り、一人で寝る。

これが俺の日常だった。

きっと近しい誰かがいる人にはこの日常が哀れに思えたりするの

だろうが、別に俺がそれに悲しみを持つことはなかった。
なぜなら俺には記憶がなかったから。
家族がいたころの記憶なんかではない。そこそこに成熟した肉体でこの家で眠っていたのが俺の持つ最も古い記憶だった。
日本語すらも忘れるほどの強烈な記憶喪失にあったとかではなかった。いやそもそも俺のそれは記憶喪失でもなかったのだろう。そこ以前の記憶が俺には存在していなかったのだから。
だから俺には一人がいやだなんて思うことはなかった。一人であること以外、経験したことがないから。
ただ、だからこそ俺は追い求めているのだ。存在していたはずの自分の記憶を。
＊
西宮という男は俺が認識している限り、クラスで人気のあるやつだった。
それもそのはず、声がよく通り、よく笑い、そして他人に対しての思いやりのある彼が人気になるのは当然の帰結だろう。
だが、俺はそんな彼が好きじゃない。
彼のことがどうでもいい俺にとってその大きな声は単にうるさいだけだったし、品性の感じられないその笑い方も好きになれなかった。
いや、情けないが正直に話そう。
俺が何よりも許せなかったのは、彼の日常が当たり前に存在していたことだった。
羨ましかった。自分がどのように生まれて、どのように生きていまがあるのかを認識できることが。
嫉妬していた。初めから家族がいて、友達もできて、一人じゃないことを当たり前に思えることが。俺にもそんな当たり前がほしいのだと。
本当に情けなく、愚かな話だと今となっては思う。それまで俺は彼のことを何も知らず、知らないくせに勝手に彼を決めつけて、勝手に嫉妬していたのだから。

＊

「西宮……」

「おう、来たか」

俺たちは次の日を待たずして、あのときと同じ場所に集まっていた。

「早速だが、本題にはいろう」

「あぁ。それでまず確認なんだが、俺たちは目的は違えどイタリアに用があるということで共通している……この認識は間違っていないよな？」

「間違いない」

「ＯＫだ。くどいようだが、今から提案することはそれが前提にないと成り立たないんでね」

確かに、西宮にしてはひどく回りくどいしゃべり方だ。俺としてはこういう石橋を叩きに叩いて会話を進める感じは好みだが、当の西宮はやはりやりづらそうな印象を俺に与えた。

「それで、その提案ってのはなんだ？」

「堺、奇しくもお前はスタンド能力っていうの厄介なものにめざめてしまった。”スタンド使いはスタンド使いにいずれ惹かれ合う”

これは俺が初めてあったスタンド使いが言っていた言葉だ。そして俺はこの言葉がスピリチュアルだとか占いだとかそういうチャチなもんじゃあねえことをこの身をもって体感している」

スタンド使いはスタンド使いにいずれ惹かれ合う。

西宮がここまでいうのだからそれは事実なんだろうと思う。だが、彼の言うとおりそれはあまりにも厄介なものだ。

あなたはこれから何度も交通事故に遭うとそう断言されたようなものだからだ。

「つまり、お前はこれからもスタンド同士の戦いに巻き込まれることになる。これは予感なんかじゃあなく、マジなことだ。人が必ずいつか死ぬのと同じように、運命で決められた、必然なことなんだ」

「それで？結論としてお前は何が言いたいんだ？」

「俺たちの目的は確かに違うのかもしれねえが、それでも目的地は

同じだ。俺はこれに数奇な運命を感じざるを得ない。
だから俺が言いたいのはただ一つ。
堺、俺と一緒にこい。
俺たち二人ならこれからの戦いも乗り越えることができる気がする。いや、俺は昨日の戦いで、そう確信した」
こいつは人たらしに違いない。
俺はこの短い付き合いで確信した。こいつは普通の人なら恥ずかしくて言えないようなことも、何の気もなしに言ってきやがるからだ。
本当に……
俺はそれを嬉しいと思った。こいつは俺という存在を認めてくれる。だから俺はこいつに協力したいと思うし、共に戦いたいとも思うんだ。
「勿論だ。それに俺は初めからそのつもりだったんだぜ？
西宮、これからよろしく頼む」
「あぁ、よろしく」
そうやって俺たちの奇妙な冒険ははじまった。
始めに断っておくが、これは気高きあの血族の物語ではない、その外の物語だ。
だが、この物語が彼らと同様に数奇な運命を背負った二人の物語であることは間違いない。
＊
「それで、イタリアへはどうやって行くつもりなんだ？」
「……あ」
しまったという顔で固まる西宮。無計画に無鉄砲なこの感じは、学校でよくみる彼と同じだった。
「そんなとこだろうとおもったぜ。お前がそういうやつだってことは昨日でだいだいわかった」
そういって何かのチケットを見せびらかすようにひらひらとしてみせた。
正真正銘、イタリア行きの航空券だった。さすがにパスポートを

もってないなんてことはないよな？

「ああ、パスポートについては心配するな。こう見えて海外へ行くことは少なくないからな。イタリアにだって何回か行ったことあるんだぜ？」

イタリアにいったことがあるっていうのに航空券のことは忘れてたんだな。電車に乗るのに切符がないと言っているようなものだろう？

「それにしても、よく航空券なんて用意できたな。俺たちバイトができるとはいえ高校生だぜ？　イタリア行きの航空券だって数万はするはずだろう？」

「まぁ、それは……色々あるんだよ」

別にやましいことなんて一つもないが、なんとなく言い淀んでしまう。俺だって一人暮らしだし食っていくためにバイトをしている。

だが、バイト以外に俺が金を持っている理由はある。あの時……俺が初めてあの部屋で目覚めたとき、俺のそばには大量の金があった。だから俺はあれから特に不自由をすることなく学生として生活することができたし、いまもバイトこそできるようになったからしてはいるが、本当は当分何もしなくてもいいほどの貯蓄があるのだ。そのおかげもあってイタリア行きの航空券だって何の躊躇いもなく買うことができた。

だが、それでも自分で得たものじゃない感覚。それと自分のことを隠しているという、この後ろめたさが俺を言いよどませた。

「……まぁ、いいたくないんなら別に俺は全く気にしない。特に興味があって聞いたってわけじゃあねえしな」

そういって俺から航空券を受けとる西宮。興味ねえんなら聞くんじゃねえよと思ったのは秘密である。

閑話①　悪魔

それは暗く、ひどく湿気た場所で産声をあげた。赤子には凡そ相応しくない、汚らわしい場所ではあったが、だとしてもそのときのことを振り替えれば美しかったと形容するだろう。

そう、それは自らを覗きこむ、微笑んだ女の顔。

それの境遇は一言で表せば特殊であった。だから産まれたばかりだというのにそのとき何を感じたか、なにがおこったのかだとかを鮮明に覚えている。

そしてそのせいか、自らが目の前にいる女とは違うものなのだということを理解していた。

女はひどく衰弱していた。そして女もまた特殊な境遇にあった。それもそのはず、特殊でないのなら、彼女はこんなところで子を産み落としはしなかったはずだからだ。

しかし、それでも女は子を産んだ。子を産めば死ぬと分かっていても。親のない子がこの先どんな目に合うとしても。たったひとつだけ、何かを願いながら。

いまでもそれは女の名を知らない。いや、名どころではない。どこで産まれ、どこで育ち、何をし、誰を愛したのか、その全てを知らぬままでいるのだ。

しかし、そいつはそれでも満足していた。

なぜなら……

なぜなら、最後に見た母のあの微笑んだ顔が美しかったから。

「おのれぇ！おのれ承太郎ッ！忌まわしきジョースターの血族！」

まるで死者の怨念のように響き渡る怨嗟の声。それが響く場所もまた、暗く湿気たところだった。

「このままではすまさんぞッ！　必ず、その血筋に産まれてきたことを後悔させてやる！」

そこには、かつて悪の救世主《カリスマ》とまで呼ばれた吸血鬼の王の姿などは

もはやなかった。あったのは、あの最凶の男の姿など見る影も残さない、矮小で醜悪な肉塊だった。
このＤＩＯが何故……何故こんなところを醜く這いつくばっているのだ。
あぁ、憎い。承太郎。いや、あの血族だ。やつらに復讐さえできれば、もはやなにも要らない。あれだけ求めた天国も、この憎しみに比べればもう霞んで見える。
しかし、それは実現するはずのない望み。いまの自分にはそんな力がない。そんなことは分かっているのだ。むしろ、最盛といってもいい自分をあの憎き承太郎は打ち破ったのだ。
しかし、その事実がなおさらＤＩＯのプライドをひどく傷つけた。あの一族さえいなければ、自分は時間を支配し、あの天敵であった太陽ですら克服し、誰もが恐れてやまない死すらも克服していたにちがいない。だというのに自分はいまなにをしているのか。太陽なぞとどくことのない、薄暗く湿気た場所を惨めに這うているのだ。まさに便所の虫以下の存在。自分が見下してやまない、そんな存在になってまで惨めにも生きているのだ。
しかし、彼はそれでも進むことをやめない。
そして、それは唐突に訪れた。
響き渡るおそらく産まれたばかりの赤子の泣き声。それを聞いたときＤＩＯは自分の幸運を確信した。
やはり運命はこのＤＩＯに味方している。思わず漏れでそうになる笑い声。
そして、思い出す。
そうだ。俺は保険をのこしていたのだと。
こんなときのためにと、温存していた力を解放する。
するとどうだろうか。
あの醜い肉塊がたちまちもとの姿を取り戻す。その姿はまさに悪の救世主、吸血鬼の王の再来といえた。
「感謝するぞ我が〝息子〟よ！これで俺は再びっ……!?」
しかし、彼が言葉を言い切ることはなかった。なぜなら、それはす

でにいまの彼の手に負えるものではなかったからだ。
「グチャッ、ぐちゃぐちゃ」
くぐもった咀嚼音が部屋にこだまする。時折あがる血飛沫と、もはや叫びとすら呼ぶことの出来ない断末魔。
仮に誰かがその姿をみたならば、それが誰であろうとこう表すだろう。
悪魔……と。